

ダイムノヴェルと奴隷制

——ヴィクター

『モーム・ギニーとそのプランテーションの子どもたち』

山 口 ヨ シ 子

I もう一つの「アンクル・トム的小屋」

メッタ・ヴィクター (1831-85) の『モーム・ギニーとそのプランテーションの「子どもたち」 ルイジアナ大農園のクリスマス休暇 奴隷のロマンス』は、奴隷問題を扱ったダイムノヴェルとしてもっとも広く読まれた作品である (Hart 155)。大衆向けの安価な小型小説本として、100 ページ程度の読物を 10 セントで販売していたビードル社は、この作品に関してはその基本ルールによらず、倍の長さの物語を倍の値段の 20 セントで売りだした。ダイムノヴェル 33 号として 1861 年 12 月に発売を開始し、10 万部を超える売上げを記録している (Harvey 39)。その前年に出版されたエドワード・エリスの『セス・ジョーンズ フロンティアの捕虜』の 60 万部、アン・ステイーヴンズの『マラエスカ 白人ハンターのインディアン妻』の 50 万部につぐ、ビードル社のヒット作品となったのである (*Dime Novels* 2, Stern 9)。¹『ニューヨーク・トリビューン』や『ニューヨーク・イヴニング・ポスト』をはじめとする当時の有力紙がこぞって転載したばかりでなく、いくつかの言語に翻訳され、アメリカ以外の国々でも広く読まれたといわれている (Harvey 39)。

ビードル社のダイムノヴェルが目指していたのは「アメリカの国民的小説」であったが (Johannsen I 37)、その意向を最大限に具現する主題としてエリスとステイーヴンズの作品が扱ったのは建国期のフロンティア

であった。一方、ヴィクターの作品は、南北戦争の最大の争点であった奴隷制をその開戦の年に扱ったというその即時性に特徴がある。ヨーロッパの小説とは異なるアメリカ独自の題材として、前者が歴史を遡って独立戦争期の白人と「インディアン」との接触を取りあげたのに対して、後者は奴隷問題という国家を二分する進行中の議論に挑んだということである。ヴィクター自身、『モーム・ギニー』以前に4編のダイムノヴェルをビードル社から出版しているが、1860年に出版された『アリス・ワイルド 筏師の娘 森のロマンス』をはじめとして、フロンティアのロマンスが主たるテーマであった。いくつもの筆名をもち、多様なテーマの小説を量産して高い人気を誇っていた作家であったが (Johannsen II 278-80)、奴隷制という時局を揺るがす政治的・社会的難問題を、老若男女に安価な娯楽を提供することを目的としていたダイムノヴェルで取りあげ、奴隷制反対の姿勢を明確に示したことは画期的であったといえるだろう。

だが、ビードル社のダイムノヴェルが南北戦争によって大きな飛躍をとげた事実を考えれば、ヴィクターがこのようなテーマを取りあげることはさほど不思議なことではないのかもしれない。ビードル社のダイムノヴェルは、「銃剣とほぼ同様の標準的な装備品」として士気を高めるために北軍兵士のもとに大量に届けられ、それによって同社の売上げが大幅に伸びたといわれている (Hart 154, Stern 9)。愛国心を鼓舞するために、多くのダイムノヴェルが独立戦争を民主主義のための戦いとして描いたが、南北戦争も同様の戦いとみなされ、その延長線上に反奴隷制という題材があったということであろう (Hart 155)。ダイムノヴェルの人気は、とくに労働者階級の読者を取り込むことによって拡大されたが、奴隷制廃止運動が労働者階級の参加によって草の根で進められたことを指摘する歴史家が多いことを考えれば (Stokes 60-61)、ダイムノヴェルで反奴隷制のテーマを扱うことは当を得ていたということであろう。

当時のアメリカに流布していた文学作品を概観しても、ビードル社が奴隷制をダイムノヴェルの恰好な題材とした状況が浮かびあがってくる。南北戦争が始まるまでの10年間をみても、文学上ではすでに熾烈な南北戦

争がくり広げられていたからである。とくに1852年にハリエット・ビーチャー・ストーの反奴隷制小説『アンクル・トムの小屋』が出版された後にこの傾向は強くなり、その半年後に出版された『アージェント・フィリスの小屋』をはじめとする奴隷制擁護の小説、とりわけ「反アンクル・トム小説」と呼ばれる作品が次つぎと出版されている。このような「反アンクル・トム小説」は、トマス・ゴセットによれば、ストーが『アンクル・トム』を出版した1852年から南北戦争が始まる1861年の間に27編（長詩1編を含む）書かれたという（429-31）。ジョイス・ジョーダン＝レイクは、ゴセットのリストから数編の作品をはずすと同時にあらたに加え、32編を「反アンクル・トム小説」としている（8）。反奴隷制を謳った『アンクル・トム』の人气が「エビデミックのように」²アメリカ国内だけでなくヨーロッパまでも拡大・浸透する一方で、さらに1856年には、『アンクル・トム』の批判に応じてストーが反抗的なタイプの黒人奴隷像に迫った『ドレッド 大湿地帯の物語』を世に問う一方で、奴隷制擁護の姿勢をとる文学が次つぎと生みだされていたのである。

奴隷制の最大の被害者たる「黒人」側からその内情を語ることも活発化し、たとえば、1853年には、初めての黒人小説といわれるウィリアム・ブラウンの『クローテル 大統領の娘』が、1859年には、初めての黒人女性小説といわれるハリエット・ウィルソンの『うちの黒んぼ』が、1861年には、ハリエット・ジェイコブズの奴隷体験記『ある奴隷娘に起こった出来事』が出版されている。ジェイコブズの作品に代表されるような、奴隷制の直接的体験者である黒人が奴隷制を語る「スレイブ・ナラティヴ」と呼ばれる奴隷体験記は、南北戦争が終了するまでに130を超える数が出版されたといわれている（Taves 210）。ビードル社が『モーム・ギニー』を出版したのは、南部の奴隷制をめぐるこのような「文学的南北戦争」が熾烈をきわめ、実際の戦争が勃発して半年余りを経過したときであった。奴隷制は、その反対派にとっても、擁護派にとっても、当時、もっとも流行していた文学的テーマの一つであり、ビードル社は『モーム・ギニー』を出版することでその流行に便乗すると同時に、出版社として奴隷制につい

での政治的見解を表明したといえるだろう。

奴隷制という深刻な問題を取りあげるにあたって、ビードル社は作品冒頭の「出版社の覚書」において、出版社としての見解を明らかにしている。その骨子は、『モーム・ギニー』の「特異な」題材が、力強さ、悲哀、ユーモア、深い理解をもって描かれ、「アメリカ文学らしい楽しいロマンス」として仕上がっているというものである。この「覚書」は、『モーム・ギニー』の内容がビードル社のダイムノヴェルの基本にそっていることの表明でもある。ビードル社は、『モーム・ギニー』を発売する約2週間前にも、新しい作家を広く公募する目的で自社の方針を『ニューヨーク・トリビュン』紙に発表しているが、その記事において、ダイムノヴェルを「誰もが十分に満足するユニークな面白さ、ユーモア、楽しい登場人物」を擁した「愛国的アメリカン・ロマンス」と定義している (Johannsen I 37)。『モーム・ギニー』の「覚書」が、この定義に限りなく近いことは明白であろう。

だが、「覚書」には、さらに『モーム・ギニー』が出版社からの「批評眼をもつ世間の人びとに対するクリスマスの贈物である」という一文がつけ加えられていることで、作品には、鋭い批評眼をもつ人だけが理解できる重要問題を含んでいることが示唆されている。階級、性、年齢、職業、民族などの違いをすべて超えた大衆読者をターゲットにしていたビードル社らしく (Johannsen I 31)、あくまでも、そのダイムノヴェルの基本路線の一つとしての恋愛問題を扱った「ロマンス」であることを強調しつつ、その一方で、特異な内容を含んでいることを暗示しているといえるだろう。奴隷制に対するメッセージを含むその「特異な」内容自体が、愛国心を鼓舞する国民小説を提供するビードル社の方針にそっているという主張であろう。

奴隷問題をロマンスというオブラートで包みながらも、その深刻さを暗示するという意味深長な姿勢は、「出版社の覚書」に続く、著者自身による「序文」にもみられる。北部の白人作家が南部の黒人奴隷の生活を描いたわけであるが、ヴィクターは、「奴隷の喜び、悲しみ、愛と憎しみ、夜

想と白昼夢、習慣、嗜好、個々の特質などを、自由に、しかし、完全に正しいと思えるような筆致で描いた」と述べている。黒人奴隷を率いて反乱を起こしたナット・ターナーを描いたくだりについても、もっとも信頼すべき筋から情報を得て書いた「まぎれもない歴史的事実の写し」であると主張して読者の批判に対する抜け道を用意しつつ、強い自信を示しているのである。

その一方で、「序文」の最後では、『モーム・ギニー』を書いた社会的・政治的意図を否定し、あくまでも「楽しい本」を提供するために奴隷制という「特異な」題材を用いただけだと明言している。クリスマス時期の奴隷を描いた「楽しい本」という体裁を示しつつ、「奴隷の真の生活をありのまま」に描いているのだから、もし道徳家や経済学者の関心をとらえたとすれば、それは小説の信憑性ゆえであろうと主張して、その解釈を読者に委ねているのである。大衆を喜ばせることを至上命令とするダイムノヴェルであることを意識しながらも、奴隷問題に対する強い意識が表れている「序文」といえるだろう。

『モーム・ギニー』が出版される約9ヶ月前に大統領に就任していたエイブラハム・リンカーンは、ヴィクターのこの作品について「『アンクル・トムの小屋』と同様に人を鼓舞する本だ」と語ったといわれる (Harvey 39)。また、ストーの弟で、高名な牧師であったヘンリー・ウォード・ビーチャーもこの作品を高く評価していたという (39)。初期のダイムノヴェルの読者として、リンカーンやビーチャーの他にも高名な政治家が名を連ねているが (Pearson 46)、『モーム・ギニー』は、そのような政治家の読者を獲得するのに一役買ったといえるかもしれない。作者のヴィクターは、ビードル社の50年にわたるダイムノヴェルの人気を編集者として支えたといわれるオーヴィル・ヴィクターの妻であったが、夫婦共同で、奴隷問題に対するメッセージを大衆読者に向けて発信し、もう一つの「アンクル・トムの小屋」を生み出したといえるだろう。ダイムノヴェルでは、編集者の作品への介入がひんぱんに行われていたとすれば (Stern 5, B. Brown 27)、『モーム・ギニー』も夫婦共同の作品とみなしてさしつかえ

ないであろう。

『モーム・ギニー』は、イギリスでは夫オーヴィルが書いた『アメリカ人の反乱』(1861)というタイトルの小冊子ともに売りだされ、反奴隷制の主張を明確に示した販売戦略がとられた (Simmons 83)。北軍に対するイギリス人の敵意を軟化するべくリンカーンの特使としてイギリスで講演活動を行っていたビーチャーは、ヴィクター夫妻の出版物に対する当地の反応を目撃し、後にヴィクターの夫に「あなたの小冊子と奥さまの小説は的確な弾を的確な場所に放っていた」と言ったという (Harvey 43)。多くのイギリス人がおもに綿花貿易など経済的理由によって南部の独立に支持を表明していたときに、ヴィクターの作品は、彼らの北軍支持への転向に強力な影響を与えたということである (43)。ヴィクター自身はイギリスにおけるビードル社の販売戦略には無頓着で、編集者の夫の考えで行ったということであるが (Simmons 83)、イギリス国民の意見の変化が南部の敗北に大きな影響を与えたことを考えれば (Stokes 54)、ダイムノヴェルが歴史を変える一助となったということもできるだろう。

本稿では、ヴィクターが万人向けダイムノヴェルという枠組みで、いかに奴隷問題を扱ったかを考えたい。本を買い読むことを「純粋なる消費行為」ととらえ、軽い小さな本を「消化し、用がすんだら捨て、どの本ともとりかえ可能な」商品ととらえる (B. Brown 20)、労働者階級を含むあらゆる階層の読者に、どのように奴隷問題を提示したか、同様のテーマを扱った同時代の文学作品と比較しつつ、検討してみたい。

Ⅱ 「楽しいロマンス」という枠組みのなかで

『モーム・ギニー』では、ビードル社のダイムノヴェルが目指す「楽しいロマンス」という枠組みで奴隷問題を描くために、さまざまな工夫が施されている。これらの工夫のうち、背景の設定、物語の構成、「幸せな結末」、宗教色の排除、ユーモアあふれるエピソードの挿入などはとくに有効に機能し、「楽しい」という形容詞とは対極にある奴隷問題を比較的深刻にな

らずに描くことに寄与しているように思われる。このスタンスにこそ、奴隷問題に対する当時の白人の一般的意識が表れていると思われるが、これら工夫は、気軽な消費行為として読書を楽しむダイムノヴェルの読者に時局の問題を提示するには、いわば必須であったといえるだろう。

背景は、タイトルに明示されているように、クリスマス時期のルイジアナのプランテーションに設定されている。ルイジアナという土地の特殊性はあまり強調されず、南部のいかなる場所にもおき換え可能ではあるが、クリスマスが奴隷たちにとっては1年の苦役から解放される「楽しい」時期として描かれている。歌や踊りに興じるクリスマスの「浮かれ気分」のなかで、白人奴隷主と黒人奴隷それぞれ2組の恋愛がどのように展開するかが作品をつらぬくプロットとなっている。奴隷主側の恋愛には当然ながらさほどの問題は起こらないが、彼らに仕える奴隷たちの恋愛に奴隷ゆえの重大な障害が生じ、それが「主人」たちの恋愛と並置されることで奴隷制の特徴が浮き彫りにされる仕組みとなっている。奴隷たちが「もっとも楽しみにしている」というクリスマス時期に物語を設定し、その雰囲気との対比で、奴隷同士の恋人たちにはつねに起こり得る問題として、人身売買による離散を余儀なくされるプロットが示されているのである。

このような背景の設定に加えて、構成にも工夫はみられ、ヴィクターが描いたロマンスは二重構造になっている。「現在」進行中の恋愛模様の間に、奴隷たちが自らの言葉で語る過去の体験が挿入されているのである。「おらたち奴隷はみんな一度ならず売られているが、どこからやってきか、ちいせえときはどうだったか、ほかのご主人さまはどんなだったか、話すべえ」という一人の奴隷の呼びかけに応じ、奴隷たちが次つぎと自らの体験を語るという構成である。たとえば、3章の「ジョンソンの話」、5章の「スキピオの話」、7章の「ソフィーの話」など、それぞれが独立した奴隷体験記の様相を呈し、そのような過去の話が農園における「現在」の出来事の合間に挿入されているのである。

「モーム・ギニー」と呼ばれ、「主人」の家族からも奴隷たちからも信頼されているという主人公のギニーは、農場におけるその重要な立場にもか

かわらず「謎や憶測を呼ぶ人物」として描かれているが、最後には「モーム・ギニーの話」としてその波乱に満ちた過去が自らの語りで明かされ、物語のハイライトを形成している。ギニーや他の奴隷たちが語る過去の話においても恋愛は重要な位置を占め、過去の恋愛と「現在」の恋愛における障害が呼応する形で、「奴隷ロマンス」という副題にそった内容になっているのである。

メイソン・ストークスは『モーム・ギニー』を、南部の農園における出来事をスケッチしたジョン・ケネディの『スワロー・バーン』(1832)とジェフリー・チョーサーの『カンタベリー物語』(1337-1400)とを折衷した物語と呼び(51)、その特徴をきわめて的確に評価している。ルイジアナの大農園のクリスマスに焦点を絞りながら、そこに集まった奴隷たちの語りによってその人生と奴隷制という「奇妙な制度」の性格が浮き彫りになる手法は、生涯に150以上の本や記事を書いたというヴィクターの(Ens xii)、物書きとしての巧みさを示すものといえるだろう。

『モーム・ギニー』を「楽しいロマンス」にしている最大の要素の一つは、その「幸せな結末」にある。タイムノヴェルのロマンスでは、たとえば、エリスの『セス・ジョーンズ』の例にみられるように、サスペンスに満ちた出来事のあと結婚で終るというパターンが広く読者に好まれていたが、『モーム・ギニー』においてもこのパターンが踏襲されている。美しい奴隷女性が奴隷主の商取引の手段として金持ちの「妾」として売られるという危機に直面し、同様に奴隷の身である恋人と逃亡するという展開であれば、現実の奴隷社会では「幸せな結末」になることは難しかったと思われる。³だが、ヴィクターの物語では、奴隷同士の恋人たちに立ちはだかつていた障害は終盤になって便宜的に取り除かれ、ふたりは望みどおりの結婚をする結末となっている。1年後の話として読者が最後に知らされるのは、それぞれが仕える「主人」同士が結婚した日の夜に結婚し、「うれしそうな、異彩を放つ、生き生きした夫婦」としての姿である。「強い感謝の絆」で「主人」夫婦に仕え、ずっとクリスマス休暇が続いているような「幸せ」を享受していると記されている。奴隷のままで幸せな結婚生活を送っていると

され、「幸せな結末」のための結末にすぎないが、「特別な社会的・政治的目的を推進するために作品を書いたのではない」というヴィクターの「序文」における主張を裏づける結末になっているといえるだろう。

「幸せな結末」は主人公ギニーにも用意され、読者が最後に目にするのは、娘が白人の金持ちと「幸せな」結婚生活を送る家で孫を抱いている姿である。北部への逃亡時に乗った船の船長が娘を見染め、その偶然の幸運によって、幸せを得るという結末である。船長は、「黒人の血が白人の血と混じることは正しいとは思えない」と公言するものの、ギニーが精魂込めて育てた「天使のように美しい」娘に恋した結果として、結婚を決意している。結婚しても、アフリカ系の血に対する夫の「偏見」が消えることはなく、彼は妻の出自について親戚や友人に「告白する勇氣はない」。したがって、ギニーも白人の妻の母親であることを名乗ることはできない。だが、白人の血が多く混じった娘は「奴隷であるべきではない」というギニーの思いが実現する形で、いわゆる異人種間結婚が成立している。ギニーは執拗に追跡する奴隷主の追手に捕らえられ、ルイジアナに売られてしまうが、その追跡を逃れた娘はその間に結婚し、ギニーは数年後、娘の夫に「買われて」自由の身となっている。逃亡、追跡、苦難、離散という段階を経て、「天使のような」無垢な少女の愛が「幸せな」結婚に結実するという、ビードル社が理想の小説とみなしていた『セス・ジョーンズ』同様のパターン(Johannsen II 32-33)が踏襲されているといえるだろう。

だが、ギニーの娘によって実現されている「純粹なる愛の勝利」というパターンは、『モーム・ギニー』の場合、ギニーとその娘という2世代にわたる悲願が達成された形となっているため、その勝利にさらなる劇的要素が加えられている。たとえば、『セス・ジョーンズ』では、インディアンに捕らえられ救出された若い娘とともに、救出した主人公自身も「インディアンが襲撃できないような幸せな開拓地」(268)で自らの愛を成就させている。だが、『モーム・ギニー』では、娘の幸せのために尽力した主人公ギニー自身の愛が成就することはない。そればかりか、3章の「ジョンソンの話」で語られる奴隷女性の恋愛も同様に悲劇に終り、彼女は逃亡

の果てに死に、その息子ジョンソンは奴隷として売られ、その悲恋話を語る役目を担っている。物語の結末でギニーの娘が到達する「幸せ」は、このような奴隷女性の悲恋話との対比において、より重みを増しているのである。娘の結婚は、夫の偏見に強く支配されているため、娘の出自は明らかにされることはなく、また、育ての父も異父兄弟も売られて行方不明のままである。だが、白人の血が多く混じった奴隷女性たちにとっては、その悲恋の歴史に終止符を打つ形の「幸せな結末」となっているのである。

『モーム・ギニー』には、『アンクル・トム』の顕著な特徴である宗教色が排除されているが、これは、一つに、気軽な読書を楽しむ読者の意向を配慮した結果といえるだろう。ピューリタンの土壌のなかで育ったストーリーが、社会的・政治的な悪として奴隷制を認識する以前に、宗教的信念として奴隷制の罪を認識し(野口「スレイブ・ナラティヴ」66)、その意識をとくに中産階級の女性読者に向けて発したとすれば、ヴィクターにはそのような姿勢はない。ストーリーのように聖書を多用し、読者に直接呼びかけて「個人になにができるか」(385)を訴えることもなく、読者に「楽しい」読書の機会を提供することに徹している。『モーム・ギニー』における宗教色の排除は、説教臭を排除し、階級を超えた万人のための「楽しい本」と提供するというダイムノヴェルの目的にそったものであり、その代りとして、恋愛という「宗教」が強調されているといえるだろう。

『モーム・ギニー』には、奴隷問題を「楽しいロマンス」の枠で語るための重要な要素の一つとして、男性奴隷の滑稽な失恋話も挿入されている。「スキピオの話」と題した章では、自らを「生まれつき幸せな黒んぼ」と呼ぶ男性奴隷の恋の失敗談が語られ、他の奴隷たちが語るセンチメンタルな悲恋話と対象を成している。「恋はかみつきの亀のようなものだから、そっとしておかないとつかまってしまう」と、バンジョー片手に恋のドタバタ劇を語るさまは滑稽であり、彼の語りが生みだすユーモアは、他の奴隷たちが語る悲劇的体験談からの転調として際だっている。親が誰かもわからず、何事にも失敗して鞭打たれ、バンジョーを習ってセレナーデを歌っても恋が実ることはなく、妻もいないと嘆く彼の奴隷人生は、その陽気な語

り口とは裏腹に悲哀に満ちたものではある。その人物像は、白人が描く「気楽な黒人奴隷」というステレオタイプであることはいままでもない。だが、「泣くぐらいなら笑った方がまし」と言うスキピオの話や歌が、奴隷たちの悲劇的恋愛模様が交錯する物語のなかに挿入されていることで、ビードル社が『モーム・ギニー』の「覚書」で読者に確約する「楽しいロマンス」の「楽しさ」にいくぶんかは寄与しているといえるだろう。

奴隷問題を「楽しく」描くという試みは、ある意味、ヴィクターが奴隷制の現実をよく知らないゆえにできたということができる。彼女は、ペンシルヴェニア州エリー湖近くで生まれ、ニューヨーク市に移るまで数回転居しているが、彼女が奴隷や奴隷制について直接知り得るような体験をしたという事実はその略歴のなかに見つけることはできない (Johannsen II 278-80)。彼女が『モーム・ギニー』で描いているのは、おそらくは本によって得た知識を独自の解釈で脚色したものであり、彼女が参考にしたと思われる文献の一つは、19世紀を代表する黒人リーダー、フレデリック・ダグラスの奴隷体験記である (Simmons 85)。ダグラスは自らの体験記『あるアメリカ奴隷フレデリック・ダグラスの生涯の物語 本人による実録』(1845)で、奴隷主が奴隷たちに与えていたというクリスマス休暇について、つぎのように記している。

クリスマスと元旦の間は休日とされている……この期間は主人たちのお陰で奴隷の自由時間とみなされたのだ。だから、私たちはほとんど好きなようにその休暇を利用、または悪用したのだった……私たち奴隷のうち、着実で、真面目で、思慮深い働き者は、トウモロコシの箒、ござ、馬の首輪、籠などを作る作業に従事したものだ。また、ほかの奴隷たちは、オポッサム、野ウサギ、アライグマなどの狩りをして過した。だが、大半の奴隷たちは、ボール遊びやレスリングやかけっこなどをしたり、ヴァイオリンを弾いたり、踊ったり、ウィスキーを飲んだりといった、スポーツや陽気なお祭り騒ぎを楽しんだのである。

ダグラスが描いたこのようなクリスマスの様子は『モーム・ギニー』の基調を成すものであり、小説では、1年分の楽しみを「仕事もなく、心配も罰もなく、ただ食べて遊ぶ」クリスマス休暇の1週間に凝縮させる奴隷たちの様子が、ヴァイオリンやバンジョー、パーベキュー、奴隷同士の結婚式、パーティー、豪華な食事、狩りなどの描写を通じて示されている。南部のいずれの州においても、奴隷主への忠誠を誓わせる手段として彼らが奴隷たちに与えていたというクリスマス休暇を (Stampp 169-70)、ダグラスが「奴隷制の総体的な欺瞞、不正、残酷さの肝心かなめの部分」として奴隷主の「利己心」や「欺瞞」を指摘していたとすれば (115)、ヴィクターはそのような主張には直接的に触れることなく、ロマンスの「楽しい」雰囲気を出すためのみに用いている。その雰囲気の中かで過去と「現在」という時間を交錯させて幾組もの恋愛模様を描き、「幸せな結末」さえも演出してみせたといえるだろう。

Ⅲ 「楽しいロマンス」を超える奴隷制の現実

『モーム・ギニー』は、1831年8月にヴァージニア州サザンプトンで実際に起こった黒人奴隷ナット・ターナーの反乱を描くことによって、反奴隷制小説としての性格を明確に示すことになる。最終的に60人余りの黒人奴隷が加わり、50人以上の白人奴隷主やその家族を殺したという、アメリカ史上最大といわれる黒人奴隷の反乱をフィクションとして描くことで、「楽しいロマンス」を超える政治性を帯びることになるのである。ナットの「右腕」であった黒人奴隷の妻ソフィーが、妻として体験した反乱の一部始終を語るという「ソフィーの話」の章によって、その部分が歴史的記録のような現実性を呈するようになったともいえるだろう。『モーム・ギニー』が「楽しいロマンス」だけの作品であったならば、リンカーン大統領に絶賛されることもなく、その読者層をイギリスにまで拡大して政治力を発揮することはなかったに違いない。だが、ナットから反乱の意図を直接聞き、彼の潜伏中には食事を運んだという奴隷女性ソフィーが語る反

乱の顛末は、フィクションのなかで際だち、奴隷体験記のような現実性と反奴隷制のメッセージを明確に伝えることになったといえるだろう。

「ソフィーの話」が奴隷体験記のような現実性を呈するのは、一つには、反乱に関わる人物が実名で登場しているためである。ソフィーが語る話には、ナット自身だけでなく、彼に最初に襲撃された彼の奴隷主トラヴィスも実名で登場している。そればかりか、ソフィーの夫にも、ナットの腹心であった実在の人物ネルソンが配されている。ヴァージニアの弁護士トマス・グレイが処刑前のナットに接見してまとめた『ナット・ターナーの告白』(1831)にも記録されている人物である。ネルソンの妻ソフィーという人物は、このような資料には記述がなく、ヴィクターが独自に創造したと思われるが、これによって、一人の男性奴隷がどのような経緯で反乱の首謀者になったかという一つの解釈を妻の視点で示すことが可能になり、反奴隷制のメッセージに説得力をもたせる結果となっている。ソフィーという人物の創造は、歴史的事実をフィクションに転化させるための、作者のきわめて巧みな手法となっているのである。その人物が生き延びてルイジアナの農園に売られ、約30年前に体験したナット事件を実名で語るという設定は、その事件の顛末を「もっとも信用できる筋」から聞いた「まぎれもない真実」とする作者の「序文」における主張を、十分補い得ているといえるだろう。

ヴィクターが「信用できる」として参考にした資料として、スコット・フレンチは、トマス・ヒギンソンによる雑誌論文の可能性を指摘している(121)。ヒギンソンは、1859年ヴァージニア州ハーパーズ・フェリーの武器庫を襲撃した奴隷廃止論者ジョン・ブラウンを物心両面で支援した「秘密の6人」の一人として知られる人物である(114)。南北戦争への歩みを強めたといわれるこの事件の2年後、「ナット・ターナーの暴動」という長い論文を書き、ボストンの知識人向け雑誌『アトランティック・マンズリー』の1861年8月号に寄稿している。「ナット・ターナーの最初の広範な歴史的記録」(French 114)といわれるこの論文の最大の特徴は、一つに、グレイの『告白』の正誤を判断しつつ、当時の地元新聞の情報などを多分

に盛り込んで事件の解釈を展開したところにある。

ヴィクターはヒギンソンのこの記事を読んでいたに違いなく、とくに2点について『モーム・ギニー』におけるナット事件の扱いとの類似点がみられる。第1には、ナットの妻についての記述を織り込み、ナットの行為に奴隷制を推進する白人たちへの復讐の動機を強調した点である。第2は、奴隷たちの反乱を長期にわたって入念に計画された民主主義への戦いとみなし、それを建国の父ジョージ・ワシントンの独立への戦いと結びつけている点である。これらは、ナット事件の唯一の第一次資料である『告白』にはみられない、ヒギンソンによる情報と解釈であるが、ヴィクターはそれらを『モーム・ギニー』に取り入れているのである。

グレイの『告白』では、ナットが奴隷主の扱いに不満を抱いていなかったことや(10)、彼が「全能の神の御手により命ぜられた大きな目標」(8)を達成する経過に重点がおかれているが、ヴィクターはナットの行為に積極的な動機を見いだしたヒギンソンに近い解釈をしている。自らもヴァージニアで奴隷を保有していたグレイに、その後の影響を恐れてか、ナットを個人的な宗教的熱狂者に仕立てあげようとする姿勢があったとすれば、ヴィクターのナット像には、そのような解釈はみられない。ナットの宗教的関心は認めつつも、彼自身に黒人たちを抑圧してきた白人たちへの復讐心を明言させ、彼には「抑圧者の手から黒人たちを救いだす」「黒人たちの解放者」として「邪悪な世界を征服する」意識が強かったという解釈が示されているのである。

ヒギンソンによるナットの妻に関する記述は、後にウィリアム・スタイルロンが『ナット・ターナーの告白』(1967)を書くにあたって信用できないとして退けた部分である(West 106)。ヴィクターは、そのくだりをとくに「ソフィーの話」におけるソフィーたち奴隷夫婦の話として描いている。ヒギンソンによれば、ナットには別の奴隷主のもとにいた奴隷の妻がいたということであるが、彼が強調するのは、奴隷の夫が奴隷の妻に対していかに無力であるかという点である。その無力さは、「略奪された船のデッキに拘束されて横たわっている男が、水平線に消えつつある海賊船に乗せ

られている自分の妻を守ることができないのと同じようだ」と形容されている(2)。ヒギンソンは「苦悩はその無力さにある」と述べ(2)、白人にその妻たちが辱めを受けてきた歴史をもつ男性奴隷の苦悩にも迫っているのである。

ヴィクターは、ヒギンソンが強調するこのような奴隷の夫の無力さにとくに興味を引かれたに違いなく、そのことは「何事が起きても気楽に笑い踊っている」タイプの黒人ではないという、ソフィーの夫ネルソンの苦難をとおして描かれている。ネルソンは、農園の監督に日々鞭打たれる生活のなかで、ソフィーとの間にできた息子も次つぎと売られ、しだいに暴動へと駆りたてられていく。とくに2人目の子どもが売られると、彼は「銃で撃たれたように倒れ込み」、より添った妻とそのまま一晩中立ち上がることもできずにいるが、その後は、妻が「恐れる」ほどに「人が変る」。ナットに妻がいたことを記しながら、男性奴隷の無力さについて力説するヒギンソンの記事は、「寡黙で、頑固な」性格を強め、ナットとともに反乱計画を進めていくという、このネルソン像に転化されているといえるのである。過去の話として描かれるネルソンの無力さが、『モーム・ギニー』のなかで「現在」の話として進行する奴隷同士の恋人たちのそれと呼応し、「結婚という、神によって人間に与えられたもっとも古く神聖な制度」(W. Brown 82)においてまで、奴隷が奴隷主に管理されることの理不尽さを訴えていることはいうまでもない。

『モーム・ギニー』にみられるヒギンソンの記事とのもう一つの顕著な類似点は、ナットの行為を長い間入念に練りあげた民主主義への戦いとみなし、アメリカ建国の精神と結びつけている点である。ヒギンソンは、グレイの『告白』に記されているナットの宗教的幻想については「ほんもの」と認めつつも(3)、ナットに鞭打たれた跡や殴られてできた瘤などがあったことなどに触れ、彼の反抗心が長い間に蓄積されていたことを明言している(2)。襲撃した黒人たちが、白人女性に下品な行為に及ぶのをナットが許さなかった可能性を当時の新聞記事より推測し、「もしそれが事実ならば」、彼が「奴隷の復讐という通常のレベルをはるかに超えた唯一のア

メリカの奴隷リーダー」であったとも述べ(4)、その行為を独立戦争時の白人たちのそれに譬えているのである(3)。

南部の白人には反乱とみなされていた行為を自由への戦いとしてアメリカ建国の精神と結びつけることは、ナットに賛同して加わった黒人奴隷たちについても同様で、ヒギンソンは、その前日まで「主人」に媚びへつらっていた奴隷たちが、「それがあたかもワシントンから自分が受け継いだ家宝であるかのように剣や銃をとった」と記している(3)。同様にヴァージニアで決起したジョン・ブラウンについては殺人を忌避しようとした穏健派とみなす一方、ナットを何人の命も容赦しない冷血派としているが、ナットを独立戦争時の英雄たちに譬えて賞賛していることには変りがない(3)。そしてこのようなヒギンソンの姿勢は、そのまま「ソフィーの話」におけるナットの発言に集約されているのである。ソフィーが語るところでは、ナットは襲撃を前にして、彼女につぎのように言う。

奥さん、元気をだしなさい。おまえさんの子どもたちはもうおまえさんの胸から引き離されて売られることはないし、夫が柱に縛りつけられて鞭で打たれることもなくなるよ。私は仕返しをするために来た。「復讐は私のものだ、私は仕返しをする」と神はおっしゃる……神は私に黒人たちの解放者になり、抑圧者の手から救いだすよう命じられた。今夜、私らは神の仕事を始める。白人の男、女、子どもの誰ひとり、サザンプトンに生かしておくことはない。私らは、ワシントンが独立戦争のときにやったのと同じように、それを成し遂げるのだ……神は「打ちなさい」と言う、だから、私らは打つのだ。

ナットの行為に復讐の意図があったことを強調するばかりでなく、それを民主主義への戦いとみなしてアメリカ史のなかに位置づけようとする点において、ヴィクターは、ヒギンソンの論文を参考にしたといえよう。少なくとも、ヒギンソンと同様の考えを『モーム・ギニー』で示したといえよう。ヒギンソンは、処刑後のナットの妻の動向についても触れているが、

そしてこの部分こそ、もっともきわだった類似点であるが(2)、ヴィクターはそのまま「ソフィーの話」に取り込み、「夫の書類を手放させようとして、白人たちは彼の妻を冷酷に鞭打った」と書いている。ソフィー自身、ナットとネルソンについての情報を求める白人たちに激しく鞭打たれるのだが、このようなソフィーという女性を創造すること自体、ヴィクターは、ヒギンソンの論文におけるナットの妻のくだりを読んで発想したのではないかと想像されるのである。

「ソフィーの話」には、このようにヒギンソンの論文を参考にしたと思われる箇所が随所にみられるが、参考資料を独自に発展させるヴィクターの小説家としての技量も十分に発揮されている。その一つは、白人の子どもが同様に惨殺されることに対するソフィーの葛藤を描くところにみられる。ナット事件を、子どもを売られた奴隷の母親の視点から語るというヴィクターの試みは、「主人」の無垢な娘が奴隷たちの自由への闘争の犠牲になることに対するソフィーの葛藤を描くに至って効果的に展開し、小説としての緊迫感を生み出す結果になっているのである。夫たちが「神の仕事をしている」と思いながらも、ソフィーは、自分が子どもと同様に育てた「主人」の幼い娘だけは殺さないで欲しいと願い、最後までその気持ちを変えることはない。それまでに自分と夫が奴隷として経験した「すべての不正や辛苦」を思い起こしても、その気持ちを変えることはないのである。完全暴力による革命に対する素朴な疑問が提示され、奴隷女性の視点でナット事件を描くという試みが、もっとも有効に機能している場面の一つといえるだろう。

ヴィクターが『アトランティック』に掲載されたヒギンソンの論文を「信用できる」資料として利用したことは、アクセスの容易さや論文の掲載時期が『モーム・ギニー』の執筆時期と重なっていることなどを考えれば、自然であったと思われる。だが、共和党結成時の政治的キャンペーンなどとも関連して、ナット事件の「もっとも激しいパニックがもっとも広範に広がった時期」といわれていた当時(Stamp 137)、ナット事件がさまざまな作品で取りあげられていたことも事実で、ヴィクターがそれらを読ん

でいた可能性も高い。たとえば、ブラウンは『クローテル』でナットの妻の名前まで記して独自の話を展開しており、ストーは『ドレッド』で同名の黒人にナットの面影を投影させている。さらに、ジェイコブズは自伝で、ナット事件後、パニック状態に陥った白人たちが黒人に対する残虐性を強める様子を記録している。このような作品のなかで、とくに『ドレッド』では、黒人奴隷ドレッドが、チャールストンで数千人の黒人と蜂起するべく計画して失敗したデンマーク・ヴィージーの息子となっており、デンマークからナットへと続く、黒人奴隷の抵抗の歴史の連続性が強調されている。『ドレッド』においてデンマークは、「アメリカ民族が示した例をまねて、黒人たちの独立を獲得しようと望みのない計画を思いついた」(204)と説明されており、黒人の反抗は、白人の権威者によって作られた表向きの歴史を覆す、民主主義への闘争として描かれているのである。

奴隷制に反抗した黒人たちをアメリカ建国の父祖たちと結びつけることは、ストーやヒギンソンらの独自の解釈ではなく、奴隷制廃止論者には、よく見られた解釈である。奴隷保有者が黒人奴隷に反撃される恐怖を強め (Chesnut 209)、奴隷制擁護論者がその理論武装を披歴する一方で (Eastman 14)、奴隷廃止論者は、黒人を国外に移住させる機運も高まるなか、建国期から黒人がアメリカに貢献してきた事実を訴えていたのである。たとえば、黒人指導者のダグラスは、1848年5月にボストンにおいて行った演説において、ナットを高貴で勇敢な精神をもった英雄的な人物として、アメリカ建国の父祖たちの伝統のなかでとらえている (Blassingame 131)。また、奴隷廃止論者ウィリアム・クーパー・ネルによる『アメリカ独立戦争における有色人種の愛国者たち』(1855)は、題名どおり黒人たちがアメリカ史において国家のためにいかに寄与してきたかを記録したもので、ストーが「序文」を書いているが、そこにナットもとりあげられている (223-26)。ちなみに、この本には、ナットの妻に関することも書かれてあり、ヒギンソンが参考にしたと思われるくだりもある。『リッチモンド・ウィッグ』紙の記者の発言として、「私はナットの妻が、鞭打たれて手放した書類を所有しているが、ナットは決起することをしばらく前から綿密

に考えていたのだ」(225)と記されている。ヒギンソンは、妻の事件後の動向ばかりでなく、ナットが何年もかけて暴動計画を練っていたことも強調しているが、おそらくはこのような情報を参考にしたのであろう。

ヒギンソンは、反奴隷制の主張ゆえにマサチューセッツにおける牧師職を追われた後、奴隷制に関する論文を次つぎと『アトランティック・マンスリー』誌に寄稿していた。未遂に終わった奴隷反乱の首謀者ヴィーギーについての記事がとくに好評を博し、『ニューヨーク・トリビューン』紙などに転載されたために、ナットについての同様の記事が「売物になる」と考え、『アトランティック』の編集者に「今まで書かれたもっとも信頼できるナラティブで、たいへんな労力を要した」と売り込んだということである(French 117)。このようなヒギンソンの略歴からも明らかなように、ナット事件は、南北戦争の時代には、奴隷制という制度をいかにとらえるかを語る試金石になっていたと同時に、書けば売れる題材ともなっていたということであろう。ヴィクターは、ダイムノヴェルにおいて奴隷制を語る試金石としてナット事件を取りあげてその意義を主張すると同時に、売物としての題材に挑んだということであろう。

IV 奴隷のなかのカラーライン

ナット事件の肯定的な描写によって、『モーム・ギニー』は反奴隷制小説と呼べるものとなっているが、黒人奴隷の描き方は人種的偏見に満ちており、その意味で、19世紀アメリカの白人社会の文化的規範を如実に映しているといえるだろう。主人公ギニーをはじめとする登場人物の多くが白人の血が混じった混血とされ、その血ゆえに優れた知性や強い感受性を秘めているとみなされている。それに対して、純血のアフリカ系黒人は、スキピオの例にみるように、「困難にあっても平気な」、「鈍感な」黒人として描かれている(Frederickson 118)。ナットとその妻でさえも、ヒギンソンの論文を参考にしたためか、白人の血が混じった混血とされており、白人の血が混じっているゆえに、奴隷制の不正を強く「感じる」心をそなえ

ているとされている。⁴白人の血が多く混じった奴隷を「優れた人間」と描く一方で、農場で働く黒人奴隷たちの「生まれつきの醜さ」を指摘し、彼らを「ボルネオの森でギャーギャー騒ぐ猿の集団」に譬える筆致には、北部の奴隷制廃止論者に強い白人優越意識があったという意味で、ヴィクターが所属していた時代と社会の価値観をそのまま映しているといえるだろう。

白い血に重きをおく姿勢は、「ジョンソンの話」と「モーム・ギニーの話」における恋愛にも明白に表れている。いずれも奴隷主と白人の血が多く混じった奴隷女性との組み合わせであるが、強調されているのは、奴隷女性の白人奴隷主に対する愛の純粋さである。奴隷女性が、白人同様の外見的「美しさ」だけでなく、19世紀の白人女性に求められた敬虔さや従順さなどをそなえた「真の女性」の具現者として描かれ、それゆえに、奴隷主との「純粋な恋愛」が成立したとされている。奴隷主が絶対的権力を行使する奴隷制のもとで、奴隷主と奴隷とのロマンスを描くということ自体に、奴隷主側に都合がよいことであるが、『モーム・ギニー』では、一貫してそのスタンスがとられているのである。

黒人奴隷に白人の血が多く混じっていることは、白人男性の奴隷女性への性的搾取の歴史をその白い肉体で示すことである。このことは『モーム・ギニー』においても、奴隷主の性的搾取が原因して、「ルイジアナの黒人女性」に「謙虚さ」や「節操」を求められない実態として示されている。だが、作品が重きをおくのは、性的搾取でなくて恋愛である。ギニーの「真の女性」としての価値観が奴隷主夫人の薫陶を受けて形成されたことや、ジョンソンの母親が奴隷主の正妻にまさる「真の女性」であったことなどが、その身体の「美しさ」とともに強調され、白人に近い特質を備えているために、奴隷主との恋愛にいたったという姿勢がつかぬかれている。悲劇的な結末にいたる奴隷女性に同情は寄せてはいるものの、白人の血を「よい血」とみなす白人優越主義が物語の基調となっているのである。

「ジョンソンの話」において、奴隷のジョンソンが語るところによれば、彼の父はヴァージニアの旧家の出で、弁舌に優れた国会議員であったとい

うことである。高名な政治家の子どもが奴隷であるという設定は、独立宣言書を起草したトマス・ジェファソンに奴隷として売られた娘がいるという『クローテル』の内容を彷彿させ、民主主義の担い手であった政治家に、奴隷の「妾」や奴隷の子どもがいることがめずらしくなかったというアメリカ史の矛盾を暗示する。だが、ジョンソン自身に父親を責める姿勢はなく、母親が15歳で自分を産んだことを純粹な愛の結果ととらえ、父の正妻を母親の敵とみなしている。彼女が「母を鞭打ち、飢えさせ、寒い思いをさせ、殺す以外のありとあらゆる仕打ちをした」として、その残酷さを非難するばかりである。奴隷女性と関係をもった奴隷主の妻が、奴隷女性に向ける嫉妬と憎悪の過激さについては、ジェイコブズの自伝にも記録されているが、ジョンソンは、父の妻が嫉妬のあまり母をも死に追いやったととらえ、彼女を殺す決意までしているのである。

ヴィクターが描く奴隷ロマンスには、たとえば、メアリー・チェスナットが日記に書いているような、奴隷主の夫が奴隷女性と関係をもつことで、その妻がいかに苦しむかというような視点はない(29)。権力構造において奴隷主の下位にある妻がさらに下位にある奴隷女性を追い詰める姿が執拗に語られ、「母はご主人さまをものすごく愛していた」という「美しい」言葉のもとに、奴隷主の女性に対する無責任さが批判されることもない。奴隷主は政治家としての仕事のために留守がちであることで免罪され、その妻の残酷さのみが、奴隷女性の息子のセンチメンタルな語りで強調されているのである。

「モーム・ギニーの話」では、ギニーが黒人の「野生の心で」愛した「若主人」に「白人の誇り高い心で」反抗する様子が語られ、奴隷主側に都合のよい恋愛が一方的に語られることはない。だが、ギニーの語りをつらぬくのは、「若主人」との間にできた娘の扱いをめぐる白人優越意識である。農場の運営に窮して真の娘を売ろうとする父親に向かって、ギニーは「己の血肉を投機に使うのはどんなクリスチャンなのか」と怒りをぶつけるが、その血を娘が受け継いでいることに対する誇りにぶれはない。青い眼の娘は、「黒んぼじゃないから、奴隷であるべきではない」として

一心に愛情を注ぐ一方、純血の黒人奴隷との間にできた色の黒い子どもたちに対しては、奴隷に売られても、2歳で別れなくてはならなくても、「自分自身の子どもとは思えず」、さほど心を痛めない。彼女の最大の関心は、自ら「自分自身の子ども」と呼ぶ青い眼の娘を白人の価値観のままに「真の女性」として育て、それにふさわしい結婚をさせることであり、それが実現されたところで、「幸せな結末」とされている。黒人の夫もその間にできた4人の子どもたちも、それぞれに売られてみな行方不明のままなのだが、それでもギニーの幸せが達成されたように描かれているのである。

『モーム・ギニー』の基調となっている白人優越意識は、奴隷制擁護の文学をつらぬく意識でもある。たとえば『アレント・フィリス』では、主人公のフィリスが頭のよい、威厳のある女性として描かれているが、その優越性は、白人との混血であることに起因していることが明示されている。その一方で、純血の黒人であるフィリスの夫には、「黒んぼはどうやったって白人のようにはなれねえです、誘惑に勝てねえです」と言わせ(32)、作品のすべての論理が、黒人が人種として「劣っている」という前提で進められている。このような奴隷制擁護論の基礎となっていた白人優越主義は、トマス・ジェファソンの『ヴァージニア覚書』(1785)における黒人観まで遡ることができるといわれているが(Finkelman 20)、同様の考えが、南北戦争時の奴隷制廃止論者のなかにも消し難くあったことが『モーム・ギニー』によって確認されるのである。ストーの『アンクル・トム』においても、逃亡奴隷ジョージ・ハリスの例が示すように、白人と見分けがつかないほど白い黒人の方が、トムのような純血の黒人よりも反抗心が強く知的に優れた人物として描かれていることを考えれば、19世紀の白人社会で広く浸透していた意識であったということもできるだろう。

ヴィクターの作品が、奴隷制擁護の小説ときわだった類似をみせるのは、主人公ギニーに乳母のイメージが与えられている点である。ギニーには、題名にも暗示されているように、白人から見た、年長の黒人女性奴隷のステレオタイプともいえるべき乳母のイメージが付されている。「モーム(Maum)」は、年上の黒人に対する敬称として、深南部では「マミー

(Mammy)」や「アーント (Aunt)」に代るものとして使われていたといわれるが (Cartwright 131)、「モーム・ギニー」という呼称に違わず、ルイジアナの農場におけるギニーの役割は、権威をもつ乳母のそれである。彼女は、料理や病人の看護などに卓越した技術を見せ、「主人」の家族から高い信頼と敬意を得ているばかりでなく、奴隷たちからはその忠告が「法律」とされるほどに尊敬されている。とくに奴隷たちは、彼女を「彼らがそれまでに出会ったどの白人にも引けをとらないくらいに優れた人物」とみなし、「物神に対するように」「畏敬や崇拜の念」を向けている。ルイジアナに移って日が浅いにもかかわらず、ギニーはプランテーションにおいて卓越した奴隷の立場を築いており、その位置は、「もっとも価値ある召使い」として、「聖なる」乳母のイメージが与えられている『アーント・フィリス』の主人公に通じるものがある。『モーム・ギニー』は、主人公の黒人女性を威厳ある「聖なる」乳母として描いている点において、『アーント・フィリス』のような奴隷制擁護の小説と共通しているといえるのである。⁵

南部を背景とする小説でよく描かれるこのような権威をもつ乳母は、キャサリン・クリントンによれば、南北戦争前の南部の歴史的資料にはみあたらず、北部の奴隷制反対論者の攻撃をかわす目的をもって意図的に創造されたという (202)。ある奴隷制廃止論者は、白人男性の奴隷女性への性的迫害が加速した南部の状態を「巨大なる売春宿」と呼んだが (Jordan-Lake 146)、そのような南部を象徴的に示すのが、白人男性の奴隷女性への性的迫害の歴史をその身で示す色の白い奴隷の増加である。『アーント・フィリス』のような奴隷制擁護の小説は、白人男性の性的放縦さが生んだこのような「白い黒人奴隷」を、「主人」の家族に信頼された「聖なる」乳母として描くことで、「白人と黒人の家族的な関係の実証的象徴」(Clinton 202)としたといえるのである。奴隷制廃止論者の批判をかわすという明白な意図をもって、白人との家族的関係を強調したこのような乳母像が、結果としては、「乳母が授乳し、温かい身体で白人の要求に応える」(202)という性的イメージを喚起していることは否めないが、

奴隷の白人家族に対する近親感を喧伝したことも確かであろう。

『モーム・ギニー』における乳母像が、『アージェント・フィリス』におけるそれと異なるのは、後者では、乳母の神聖さや権威が主人の家族との関係で語られるのに対して、前者では、農場の奴隷たちとの関係で語られる点である。言い換えれば、『アージェント・フィリス』では、「聖なる」乳母の奴隷主一家への献身に焦点があてられているのに対して、『モーム・ギニー』では、農場の奴隷たちに対する愛情に重きがおかれている。「彼女のプランテーションの子どもたち」というサブタイトルが示すように、ギニーは同じ奴隷の身である年少者に対して、「聖なる」乳母の役割を果たしているのである。ギニーがもっとも親身になって世話するのが、自身の青い眼の娘同様、白人の血が多く混じった奴隷たちであることを考えれば、ここでも明白な白人優越意識が存在していることは確かである。だが、ヴィクターの乳母像は、奴隷主の子どもたちではなく、農場の奴隷たちとの密接な関係が強調されている点で際だっているのである。ヴィクターは、『モーム・ギニー』の前年出版した『アリス・ワイルド』では、フロンティアで暮らす母親不在の白人家庭で「一家の女主人のような」(6) 役割を果たす黒人乳母を描いており、彼女がどのくらい意識して乳母像を描いていたかは不明である。だが、少なくとも、『モーム・ギニー』では、ギニーが奴隷たちに対して「聖なる」乳母である点で、『アージェント・フィリス』のような奴隷制擁護の小説とは異なる特徴を示しているといえよう。

『モーム・ギニー』には、このように白人優越意識が強く表れているものの、その意識をもつにいたる黒人たちの性格が奴隷制によって形成されたという意識も同時に表れている。もし白人に比べて黒人が「劣っている」とするならば、アメリカにおける悲惨な状況が影響しているという意識が、ジェフエソンまで遡るといわれる奴隷制擁護論者の根本になかったことを考えれば、この点において、ヴィクターは明らかに奴隷制擁護論者とは一線を画しているといえるだろう。白人の黒人に対する精神的・身体的優越性を明言しているジェフエソンの『ヴァージニア覚書』に通じる意識はヴィクターにも明らかにみられ、それは黒人を猿に譬える箇所にもっと

も強く表れているが、その一方で、黒人の特異性が奴隷制によって形成されたという意識も垣間見せているのである。

この姿勢は、『モーム・ギニー』の「序文」の冒頭に表れている。アメリカのプランテーションにおける黒人たちには、アフリカなどの黒人とは異なる特徴がみられるとし、奴隷制のもとで、本来の性格が「和らげられた」という見方を示している。「迷信的で、興奮しやすく、空想的で、大げさになる傾向が強く、容易に脅え、軽率で依存心が強い」などの特徴を列挙し、これらの特徴の形成に奴隷制が影響を与えたとみなしている。黒人の性格や奴隷主と奴隷との関係については、観察者によってきわめて異なるので、「文明のドラマにおけるアフリカ人の通常の状態に関して」確立した意見をもつことが難しいとし、黒人に対する高姿勢な態度をのぞかせながらも、奴隷制が黒人の性格形成に影響を与えたという認識は明白に示しているのである。

このような姿勢は、小説のなかにおいても同様にみられる。農場の奴隷たちを「ボルネオの森の猿」のように「陽気で気楽だ」と譬えるくんだりでも、彼らが奴隷の刻印を押され、隷属状態が長く続いたために、そのような性格を獲得したととらえている。ジェファソンが、古代ローマの白人奴隷が悲惨な境遇にありながら優れた芸術作品を生みだしたことを例にあげ、アメリカの黒人奴隷が「劣っている」のは、たんに悲惨な状況ゆえではないととらえていたとすれば(148)、ヴィクターは、強い白人優越意識をみせながらも、奴隷たちの生育環境を意識している点で奴隷制の悪影響をより理解していたといえるだろう。

自らが白人の血が混じった黒人であったウィルソンは、『うちの黒んぼ』において、奴隷制を早くから廃止していた北部における黒人差別について描き、奴隷制廃止論者の偽善や欺瞞を暴きだした。南北戦争前のアメリカを旅したフランス人のアレクシス・ド・トクヴィルも、奴隷州よりも奴隷制を廃止した州の方が人種的偏見が強いことを指摘し、黒人と混和することに対する白人の恐怖を看破している(402-03)。19世紀中葉には、ナショナリズムの高揚により、アングロ・サクソンの優越性を科学的に証明しよ

うとする学問が盛んになり、それによって奴隷制擁護論を陰で支え、北部の奴隷解放論者までもステレオタイプの人種観に傾倒していったといわれている (Hinks xxvi, 野口「キリスト教」200)。黒人を猿に譬えるヴィクターも、彼女が所属していたこのような時代と社会の文化を反映しているに違いなく、その意味では、隷属状態におかれた黒人たちの「現実」を描こうとしたヴィクターの試みは、限りなく現実を映しだしているといえよう。

V 結末の意味するもの

ビードル社のダイムノヴェルが、小説本が産業資本主義機構のなかで機能し始めるきっかけを作ったとすれば、奴隷制という国家を二分する議論を扱った同社の本についても、この事実をもっとも考慮する必要があるだろう。ダイムノヴェルを書くことは、自らのイデオロギーや知識を披歴することだけでなく、つねに売れる商品として読者の興味を喚起することが求められたということであり、ヴィクターが『モーム・ギニー』において、ロマンスに重きをおき、奴隷のままで「幸せな結末」を用意するのもそのためであろう。だが、このスタンスこそ、『モーム・ギニー』をつらぬく白人優越意識と同様に、ダイムノヴェルの作者であり、読者であった南北戦争時の白人の意識をよく反映しているという見方もできるのである。反奴隷制の意識は、当時の白人作者にとっては、奴隷のままで「幸せな結末」を描き、白人大衆読者にとっては、それを「楽しんで」受け入れることが可能であったということである。

『モーム・ギニー』の結末が意味するところは、黒人たちの奴隷体験記の結末と比べればより明らかになる。ジェイコブズが、自らの奴隷体験記を白人中産階級層の女性読者を対象とし、女性向けの物語として書いたことはつとに知られているが (巽 223)、それでも譲れない結末は、「そのような物語のつねとしての結婚ではなく」、人間としての「自由」であった (156)。ダグラスの自伝でも、「奴隷制が正しい」と考えられるのは「人間

でなくなるとき」初めて可能であると断言し(135)、「自分が自分自身の主人になり」、自らと妻の生活を労働で支えるという独立に主眼がおかれている(150)。奴隸体験記のこのような結末からいえば、ダイムノヴェルが、奴隸同士の恋人たちを奴隸のままに結婚させて「幸せな結末」とし、それが広く読まれたということは、一面で、その事実こそ、奴隸制に対する当時の白人の一般的意識が表れているとみることができるのである。

反奴隸制を唱えていた北部の白人たちの黒人たちに対するこのような偏見については、奴隸制擁護を訴える『アース・フィリス』の結末でも指摘されている。イーストマンは、最終章で物語を語ることを放棄して自らの奴隸制擁護論を熱く展開するのだが、同時に、北部における人種的偏見や差別についても厳しく指摘している。奴隸制の悪を認めながらも、南部における奴隸が「人道的で親切な」奴隸主のもとで「幸せ」だと主張して、奴隸制の存続を訴える一方、北部には「黒人と友人になるほどの善人はいない」と断言し、北部人のなかに「黒人に対する克服し難い嫌悪感がある」と言い放つ(279)。「異人種間の混血を完全に否定する」と宣言し(279)、黒人との隔離政策を訴える感情的な筆致には、イーストマン自身、黒人恐怖症であることが表れているが、それが北部人にもあると断言しているのである。

イーストマンが指摘する北部人の「黒人に対する克服し難い嫌悪感」は、ウィルソンが『うちの黒んぼ』において奴隸のように扱われる自由黒人の苦難をとおして描いている(17)。社会的な動きとしては、自由黒人をアフリカのリベリアに移民させようとする計画に、その一端をみることができるだろう。この計画は、1817年に設立されたアメリカ植民協会を中心に推進されたものであり、64年に協会が解散するまでには、約1万3千人の自由黒人がリベリアへの移住を果している(*African American Mosaic* 1)。黒人が政治的な主権を握るということを奴隸制の理想的な解決策とみなし、奴隸制廃止論者の賛同者もいたといわれているが(*Staudenraus* 125-26)、ダグラスら黒人指導者たちは反対を唱えていた。自由黒人をアメリカ国外に退去させるという計画に、暴動や異人種間結婚を防ごうとした白人

たちの意図を見ていたからである。このことは、ヴァージニアの議会でその計画案が取りあげられたり (French 57-60)、南部の奴隷主たちが植民協会の会員であったことなどからも明らかであろう (Yarema 15)。

ダグラスは、自らの奴隷解放運動の機関紙『ノース・スター』1849年1月26日付けにおいて、200年以上にわたって黒人がアメリカの発展に貢献してきた事実を強調するとともに、同胞が奴隷の身でいる国を去って外国に行くことはできないと主張し、アメリカに住み続ける意志を強調している (126)。ダグラスがナット・ターナーを独立戦争時の英雄になぞらえて称える意味は、黒人の移民計画に反対を示すこのようなコンテキストでより明らかになるのであるが、移民計画に対するダグラスの見解は、その20年前に出版された『世界の黒人市民に告ぐデイヴィッド・ウォーカーの訴え』に通じるものである。デイヴィッド・ウォーカーは、その訴えのなかで、アフリカ移住計画に、自由黒人を引き離すことによって奴隷制を存続させようとする意図を見抜き、アメリカが黒人たちの「血」と「涙」で作った母国であることを主張している (60)。イーストマンが北部人のなかに存在していると指摘し、自らも内包していることを明らかにする黒人恐怖症は、アメリカの地で人種を超えて共存する道を模索することではなく、黒人を国外に退去させるという政策を編みだしたといえるのである。

この観点からみると『アンクル・トム』の結末は、きわめて意味深長である。主だった黒人の登場人物はみなアメリカを去り、アフリカのリベリアで新生活を始めているからである。奴隷のままで結婚して「幸せ」だとする『モーム・ギニー』の結末は、いかに「親切な」奴隷主のもとにいる奴隷でさえ、その経済事情の変化によって売られる可能性があるという『アンクル・トム』の冒頭へとつながるのだが、その『アンクル・トム』でさえも、結末は、黒人をアメリカ国外へ退去させ、黒人恐怖症の表れともみえる解決策を示しているということである。黒人奴隷たちは自ら自由を求めるより「親切な」奴隷主のもとにいた方が幸せだ、と主張する奴隷制擁護論に抗するために、「親切な」奴隷主のもとで「幸せに暮らす」奴隷にふりかかる不幸を描いたストーリーであったが (Key 10)、その彼女でさ

えも、アメリカの地で人種の違いを超えて共存する考えがなかったとも読めるからである。

ダグラスは、この結末に反対を示し (Hedrick 235)、ストーリー自身も「できるなら変更したい」とダグラスに手紙を書いたことはよく知られている (Stepito 141)。ストーリーは『アンクル・トム』が社会を揺るがすほどのベストセラーになり、黒人たちからの反撃を受けるまで、その結末の意味するところを意識しなかったと思われるが、そこにこそ、19世紀のアメリカ社会の風潮が表れているといえるだろう。

このように『モーム・ギニー』が出版された当時の奴隷問題を扱った作品の結末を比較すると、反奴隷制小説、奴隷制擁護の小説の双方に、当時のアメリカ社会の反映といえる、白人優越意識や黒人恐怖症を内包していることがわかる。ダイムノヴェルがあらゆる階級の読者にもっとも手軽な読書を提供していたことを考えれば、白人優越意識や黒人恐怖症をもっとも直接的な形で提示していたことは当然ともいえよう。黒人奴隷には、「奴隷を買う人も売る人も、白人全体も呪ってやる」と言わせる一方で、奴隷が「鈍感で」売られても自分の馬ほどには悲しみを「感じない」と公言する奴隷主を描き、結局は、奴隷制のもとの僥倖を「幸せな結末」として描くことが、南北戦争時の白人奴隷廃止論者の意識であったということであろう。リンカーンが奴隷解放宣言を発表したのは、『モーム・ギニー』が出版されてから約1年後の1863年元旦のことであったが、そのリンカーンでさえ、このダイムノヴェルを高く評価していたことは、その後アメリカが闘わなければならない人種問題の複雑さを予見させるのである。

注

1 ベストセラーの条件を人口比で算出し、1860年代には30万部以上の売上げをベストセラーと設定したフランク・ルーサー・モットは、そのリストにエリスとステイーヴンズの作品を入れる一方、ヴィクターの『モーム・ギニー』については、「ベターセラー」のリストに入れている (320)。1冊につき3万5千部

から8万部を売上げていたといわれる当時のビードル社にとって(149)、通常の倍の値段20セントで10万部を売上げた『モーム・ギニー』は、会社に確実な利益をもたらした作品だったといえるだろう。

2 1852年12月4日付けの週刊新聞『リテラリー・ワールド』には、『アンクル・トム』の人気の波及する状態を、「アンクル・トム・エピソード」と題して報告する記事が掲載されている。なお、この記事については、ステイヴン・レイルトン監修の「『アンクル・トム』とアメリカ文化」を参照。

3 逃亡奴隷がどのような罰を受けたかについては、たとえば、『クローテル』では、公開で火あぶり刑にされた例が示されている(95)。

4 当時の指名手配用の文書では、「肌の色はかなり明るいがムラトでない」とあり、ナットに白人の血が混じっていないことが強調されている(Greenberg 14)。だが、ナットに白人の血が混じっていたか否かは、彼の行為をどのようにとらえるかによって解釈が異なり、黒人に対する異なる意見そのままだに、さまざまに解釈されている(14-18)。

5 『アージェント・フィリス』における乳母像については、拙稿「『アンクル・トムの小屋』と『アージェント・フィリスの小屋』—南部の反応」(233-60)を参照。

引用文献

The African-American Mosaic: A Library of Congress Resource Guide for the Study of Black History and Culture. 24 Oct. 2009 <www.loc.gov/exhibits/african/afam002.html>.

Brown, Bill, ed. *Reading the West: An Anthology of Dime Westerns*. Boston: Bedford/St. Martin's, 1997.

Brown, William Wells. *Clotel; or The President's Daughter: A Narrative of Slave Life in the United States*. 1854. Ed. Robert S. Levine. Boston: Bedford/St. Martin's, 2000.

Blassingame, John W., ed. *The Frederick Douglass Papers*. Vol.2. New Haven: Yale UP, 1982.

- Cartwright, Keith. *Reading Africa into American Literature: Epics, Fables, and Gothic Tales*. Lexington: UP of Kentucky, 2004.
- Chesnut, Mary Boykin. *Mary Chesnut's Civil War*. Ed. C Vann Woodward. New Haven: Yale UP, 1981.
- Clinton, Catherine. *The Plantation Mistress: Woman's World in the Old South*. New York: Pantheon, 1982.
- Dime Novels: The Popular Paperback of the Nineteenth Century*. 7 Jan. 2008 <reepages.genealogy.rootsweb.ancestry.com/~poindexterfamily/ChristinesPages/Dimers.html>.
- Douglass, Frederick. *Frederick Douglass: Selected Speeches and Writings*. Ed. Philip S. Fiber. Chicago: Lawrence Hill, 1999.
- . *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave, Written by Himself*. 1845. Ed. William M. Andrews and William S. MacFeely. New York: Norton, 1997.
- Eastman, Mary H. *Aunt Phillis's Cabin; or, Southern Life As It Is*. 1852. Upper Saddle River, NJ: Gregg, 1968.
- Ellis, Edward S. *Seth Jones: or, The Captives of the Frontier*. 1860. B. Brown 165-268.
- Enss, Chriss. "Dime Novelist Metta Victor." Victor, *Alice Wilde* ix-xii.
- Finkelman, Paul. *Defending Slavery: Proslavery Thought in the Old South, A Brief History with Documents*. Boston: Bedford/St. Martin's, 2003.
- Frederickson, George M. *The Black Image in the White Mind: The Debate on Afro-American Character and Destiny, 1817-1914*. Middleton, CN: Wesleyan UP, 1971.
- French, Scot. *The Rebellious Slave: Nat Turner in American Memory*. Boston: Houghton, 2004.
- Gossett, Thomas F. *Uncle Tom's Cabin and American Culture*. Dallas: Sothern Methodist UP, 1985.

- Greenberg, Kenneth S. "Name, Face, Body." *Nat Turner: A Slave Rebellion in History and Memory*. Ed. Kenneth S. Greenberg. Oxford: Oxford UP, 2003. 3-23.
- Grey, Thomas R. *The Confessions of Nat Turner: The Leader of the Late Insurrection in Southampton, Virginia*. 1831. N. p.: Kessinger, n. d.
- Harvey, Charles M. "The Dime Novel in American Life." *Atlantic Monthly* 100 (1907): 37-45.
- Hart, James D. *The Popular Book: A History of America's Literary Taste*. New York: Oxford UP, 1950.
- Hedrick, Joan D. *Harriet Beecher Stowe: A Life*. New York: Oxford UP, 1994.
- Higginson, Thomas Wentworth. "Nat Turner's Insurrection." 1 Aug. 2009 <<http://www.unl.edu/Price/dickinson/analoguel0.html>>.
- Hinks, Peter. Introduction. Walker xi-xliv.
- Horsman, Reginald. *Race and Manifest Destiny: The Origins of American Racial Anglo-Saxonism*. Cambridge: Harvard UP, 1981.
- Jacobs, Harriet A. *Incidents in the Life of a Slave Girl*. 1861. McKay and Foster 5-165.
- Jefferson, Thomas. *Notes on the State of Virginia*. 1785. New York: Penguin, 1999.
- Johannsen, Albert. *The House of Beadle and Adams and Its Dime and Nickel Novels: A Story of a Vanished Literature*. 2 vols. Norman: U of Oklahoma P, 1950.
- Jordan-Lake, Joyce (Joy) Lyn. *Fighting Fire with Fiction: Matrifocal Representations and the Image of the Female Christ in Anti-Uncle Tom's Cabin Novels*. Diss. Tufts U, 2001. Ann Arbor: UMI, 2006. 3004800.
- McKay, Nellie Y., and Frances Smith Foster, eds. *Incidents in the Life of a Slave Girl*. By Harriet A. Jacobs. New York: Norton, 2001.

- Mott, Frank Luther. *Golden Multitudes: The Story of Best Sellers in the United States*. New York: Macmillan, 1947.
- Nell, William Cooper. *The Colored Patriots of the American Revolution, With Sketches of Several Distinguished Colored Persons: To Which is Added a Brief Survey of the Condition and Prospects of Colored Americans*. Boston: Wallcut, 1855.
- Pearson, Edmund. *Dime Novels; or, Following an Old Trail in Popular Literature*. Boston: Little, 1929.
- Railton, Stephen. *Uncle Tom's Cabin and American Culture: A Multi-Media Archive*. 1 Sept. 2009 <<http://utc.iath.virginia.edu/>>.
- Simmons, Michael L. "Maum Guinea: or, A Dime Novelist Looks at Abolition." *The Journal of Popular Culture* 10.1 (1976): 81-87.
- Stampp, Kenneth M. *The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South*. New York: Vintage, 1989.
- Staudenraus, P. J. *The African Colonization Movement: 1816-1865*. New York: Columbia UP, 1961.
- Stepto, Robert B. "Sharing the Thunder: The Literary Exchanges of Harriet Beecher Stowe, Henry Bibb, and Frederick Douglass." *New Essays on Uncle Tom's Cabin*. Ed. Eric J. Sundquist. Cambridge: Cambridge UP, 1986. 135-53.
- Stern, Madeleine B. "The Role of the Publisher in Mid-Nineteenth-Century American Literature." *Publishing History* 10 (1981): 5-26.
- Stokes, Mason. *The Color of Sex: Whiteness, Heterosexuality, and the Fictions of White Supremacy*. Durham: Duke UP, 2001.
- Stowe, Harriet Beecher. *Dred: A Tale of the Great Dismal Swamp*. 1856. New York: Penguin, 2000.
- . *A Key to Uncle Tom's Cabin: Presenting the Original Facts and Documents upon Which the Story Is Founded*. London: Bosworth, 1853.

- . *Uncle Tom's Cabin: Authoritative Text, Backgrounds and Contexts, Criticism*. 1852. Ed. Elizabeth Ammons. New York: Norton, 1994.
- Taves, Ann. "Spiritual Purity and Sexual Shame: Religious Themes in the Writings of Harriet Jacobs." McKay and Foster 209-22.
- Tocqueville, Alexis de. *Democracy in America and Two Essays on America*. New York: Penguin, 2003.
- Victor, Metta V. *Alice Wilde: The Raftsmen's Daughter; A Forest Romance*. 1860. Guilford, CN: TwoDot, 2006.
- . *Maum Guinea and Her Plantation "Children" or Holiday-Week on a Louisiana Estate: A Slave Romance*. 1861. Bedford, MA: Appkewood, n. d.
- Walker, David. *David Walker's Appeal to the Colored Citizens of the World*. 1829. University Park: Pennsylvania State UP, 2000.
- West, James L. W., ed. *Conversations with William Styron*. Jackson: UP of Mississippi, 2005.
- Wilson, Harriet E. *Our Nig: or, Sketches from the Life of a Free Black*. 1859. New York: Penguin, 2005.
- Yarema, Allan E. *American Colonization Society: An Avenue to Freedom?* Lanham, MO: UP of America, 2006.
- 高野フミ編 『「アンクル・トム的小屋」を読む 反奴隷制小説の多様性と文化的衝撃』 彩流社 2007 年
- 巽孝之 『ニュー・アメリカニズム 米文学思想史の物語』 青土社 1995 年
- 野口啓子 「『アンクル・トム』の政治的感化力とキリスト教」 高野 63-86 頁
- 「『アンクル・トム的小屋』とスレイヴ・ナラティヴ——ストーリーの色分けされた黒人たち」 高野 191-21 頁
- 山口ヨシ子 「『アンクル・トム的小屋』と『アーン・フィリスの小屋』——南部の反応」 高野 233-60 頁